組織目標評価報告書（平成２４年度）

部局名：岡山大学病院

目　標	目標の達成状況（成果）及び新たに生じた課題への取組 （部局での検証とそれに対する取組）

①教育領域

①-1 目標

　教育面では、学部学生、大学院生、研修医、看護師、医療技術職員等の教育環境、労働環境の改善整備及び増加しているこれらの医療スタッフに対する研修を強化する。また、連携のとれたチーム医療のための研修を実施してレベルアップを図り、優れた医療人を養成する。

①-2 目標とする（重要視する）客観的指標

自己評価

　職員等の教育面では、主に次のような成果をあげることができた。
①文部科学省GP「看護師の人材養成システムの確立」（平成２４年度は４年目）、「チーム医療推進のための大学病院職員の人材養成システムの確立」（平成２４年度は２年目）及び「中国・四国高度がんプロ養成基盤プログラム」（平成２４年度採択）により、高度医療に対応できる職員等の教育を体系的、実践的に行い、その中で、各職種ごと或いは職種を超えたチームでの演習・研修会・勉強会を開催しレベルアップを図った。
②女性医師復帰支援と再教育を継続して実施した。
③教育環境、労働環境改善として、学部学生・研修医に対して、医療教育統合開発センターとの共同により開発したシミュレーション教育による研修プログラムを効率的な利用ができるよう環境を整備したこと、医療技術職員が共有できる院内HP上でのWebクラスによる臨床学習制度を設置したこと及び卒後臨床研修センターによる研修プログラムの見直・充実を図るとともにアメニティーの向上を図ったことがあげられる。また、人員配備の面で働きやすい職場を目指すため、職種ごとに個別に増員計画を執行部で検討し、改善を図った。
④昨年度、病院職員の意欲の高揚を図る目的で新設した、病院長が表彰する「楷の木賞」について、本年度も引き続き選考し、個人及び医療チームに授与し、表彰した。

②研究領域

②-1 目標

　研究面では、新医療研究開発センターを窓口として、本院で実施される臨床研究の質の向上を目的として設置された臨床研究審査委員会を中心に、臨床研究・橋渡し研究の充実を図り、治験実施体制のより一層の整備を進める。

②-2 目標とする（重要視する）客観的指標

科研費申請率，科研費採択率，採択金額
共同研究件数，受託研究件数，受入金額

自己評価

　平成２３年度に整備した新医療研究開発センターの研究体制により、新規の医療の開発、治験実施の体制強化、臨床研究に関する臨床研究の審査について効率的な運用を図ることができた。
　主な取組みとしては、
①橋渡し研究部では、REIC（前立腺癌）臨床研究で今までに２０名の患者に遺伝子治療が実施されている。一部の症例では臨床的有効性を示唆する所見が得られており、重篤な有害事象は発生していない。また、腫瘍融解ウイルス製剤テロメライシンの臨床研究実施に向けた制度上の支援、または製剤の保管調整などの支援を実施した。今後は、REIC（悪性中皮腫）治療実施に向けての支援等を行っていく予定である。
②臨床研究部では臨床研究審査委員会を設置し手順を定め、１月に第１回の審査委員会を実施し、関連した業務の検証を行った。また、臨床研究中核病院事業採択に向けて人員整備など種々の整備を行った。
③再生医療部では、臨床研究情報センター（TRI）と連携した心筋再生医療の日本主導型グローバル臨床研究体制整備（厚生労働省支援プロジェクト）に関しTRI担当者による訪問を受けるなど、段階的に国際展開事業を展開するための事業を進めている。
④治験推進部では、治験の推進と支援を行い、岡山治験ネットワークの管理及び疾患別臨床研究（治験）ネットワークの管理を行った。その実績としては、
　1）平成24年度は新規47件、継続79件を受託した（H25年2月現在）。
　2）岡山治験ネットワーク参加施設は現在24施設であり、毎月の定例会議を行い、計画通りにネットワークの管理を行った。
　3）疾患別臨床研究ネットワークは、治験を2件受託し、自主臨床研究１件が進行中である。 国際共 同研究（治験）は新規6件、継続29件を受託した。
⑤人材育成部ではPMDAとの連携大学院におけるカリキュラムの策定を行うとともにPMDA派遣職員の選定を行った。PMDA経験者による学内セミナーを実施し学内への啓蒙活動を行った。

③社会貢献（診療を含む）領域

③-1 目標

1．社会貢献面では、地域医療連携体制の充実のための地域医療連携システムの定着（前方支援及び後方支援連携）を図り、利用施設拡大を図るとともに、地域の高度医療に対する要請に応える中核医療機関としての機能を充実する。

2．診療面では、ロボット手術をはじめとして低侵襲医療の拡充など先進医療を推進し、高度で安心・安全な医療を提供して、「最後の砦」としての大学病院の役目を果たす。
　また、看護師の安定確保に努力し、医療サービスの向上に努める。

3．運営面では、総合診療棟に円滑に移転できるよう準備・調整を行うとともに、経営力の強化を引き続き図るために、経費の節減、適切な設備投資及び安定的な人員増加を図り、持続的な成長を果たす。また、病床稼働率の向上・安定化を図る検討する。

③-2 目標とする（重要視する）客観的指標

医療収入、診療経費、病床稼働率

自己評価

＜社会貢献面＞
（1）地域医療連携の機能を充実させるため、病院総合患者支援センターは、平成２３年度に見直しを図った歯科系の患者紹介システムの運用について更なる調整を行い、医科系紹介システムと統合・連携することが決定された。また、昨年度関連病院及び紹介数の多い病院への登録・接続が完了した地域医療連携システムについて、平成２４年４月からオンライン予約システムを運用開始し、１０月からは、重症系システムの公開を開始した。さらに利用施設の拡大については、医療ネットワーク岡山（晴れやかネット）との協調により１１月８日に説明会を実施し、運用を開始した。

（2）地域の高度医療に対する要請に応える中核医療機関としての機能の充実としては、次のことがあげられる。
①平成２４年４月から、頭頸部領域における多職種専門医療従事者の連携により、同領域の悪性腫瘍患者への適切な治療を行うために頭頸部がんセンターを設置した。
②平成２４年４月に、岡山県地域医療再生計画に基づく低侵襲治療センター及び糖尿病センターを設置。
③岡山県に申請していた認知症疾患医療センター及び高度救命救急センターについて、平成２４年４月設置が認められ、併せて災害拠点病院として指定された。なお、災害拠点病院指定を受けて、現在DMAT指定に向けた養成研修受講等、準備を進めている。
④平成２４年６月、インターベンショナル・ラジオロジーの手技を用いて画像ガイドの低侵襲治療を行うため、IVRセンターを設置した。
⑤平成２４年９月には、小児科、小児外科など6診療科と子どもの遺伝診療部門、子どものこころ診療部門で構成される、小児医療センターを設置した。
⑥小児医療センター設置に関連し、子どもの血液・悪性腫瘍に対する高度な医療を提供するため、平成２４年１１月に小児血液・腫瘍科を設置した。
⑦平成２５年１月に口腔検査・診断センターを設置し、地域の歯科医療機関からの要望の多い顎顔面口腔領の検査・診断について、検査・診断専門医療従事者の連携により、診断情報の共有化を図り、適切な検査・診断を行っている。

＜診療面＞
　病院では、前立腺がんに対する新規の医療であるREIC遺伝子治療がすでに２０例に、また、平成２２年８月に導入した内視鏡手術ロボット「ダ・ヴィンチS」は主に前立腺摘出術に使用していたが、治療範囲が拡大され、平成２４年度は既に前立腺治療６２例、腎切除３例、胃切除１０例、子宮摘出２例等実施しており、術後早期の退院と高いQOLを実現している。
　臓器移植実績では、改正臓器移植法の全面施行後の移植も順調に進んでおり、平成２４年１１月には生体移植を含めて、肺が１００例目、肝臓が３００例目を揃って達成し、特に肺移植の１００例達成は国内最速となった。

＜運営面＞
　総合診療棟の本体工事が平成２４年１０月に完了し、平成２５年５月の本格稼働に向けた医療機器の搬入等の準備を進めているところである。開院後は、手術室の拡充に伴い、年間手術件数１万件以上の目標達成に向け努力する。医療スタッフに関しては、看護師、薬剤師、臨床工学技士等の医療技術職員の安定的確保について、各現場と執行部において協議し、適正な配置に努めた。
　また、平成２４年度のMBO（目標管理）では各診療科に加えセンターについても実施し、５月から７月にかけてヒアリングを実施した。毎週実施している経営戦略会議では病床稼働率、診療費用請求額等の経営指標を迅速に報告するとともに、毎月の医療費比率、人件費率等に関するデータを執行部会議及び診療科長等会議において分析・把握し対策等について協議した。その結果、平成２３年度と比較し、収入額が１．３２０，０００千円増、材料費△３７，０００千円となった。
　さらに岡山医療センターから病床マネジメントを担当する職員を講師として招き、病院職員の意識向上を図るとともに、病床マネジメント会議の再開や毎回の経営戦略会議に病棟医長・師長を参加させ、病床稼働率向上の問題点の抽出、解決策の検討を行った。その結果、病床稼働率が８８．２％（平成２４年４月～１月までの累計値）とほぼ昨年と同じ推移であったが、在院日数の短縮につながった。

【総括記述欄】

平成２４年度の組織目標の達成は、病院全体として非常に良好であった。特に、平成２４年４月新たに設置した各センターは、岡山県をはじめ地域との連携により円滑な運営が行われており、岡山県の中核を担う拠点病院としての役割を十分果たしていると言える。
診療面においては、前立腺がんに対する新規の医療であるREIC遺伝子治療、内視鏡手術ロボット手術、臓器移植手術が順調に実施された。特に内視鏡手術ロボット「ダ・ヴィンチS」は主に前立腺摘出術に使用していたが、治療範囲が拡大され、平成２４年度は既に前立腺治療62例、腎切除3例、胃切除10例、子宮摘出2例等実施しており、術後早期の退院と高いQOLを実現している。また、臓器移植の実績では、平成２４年１１月には生体移植を含めて、肺が１００例目、肝臓が３００例目を揃って達成し、特に肺移植の１００例達成は国内最速となった。
また、病院の理念に「優れた医療人育成」を掲げているが、本院では職種を超えたチーム医療にも力を注いでおり、医療スタッフによる研修会・勉強が活発に行われるなど常に連携を意識した取組みが実施できている。
さらに、平成２４年度は、総合診療棟が完成し、IVRセンターの配置や手術室の拡充など、「最後の砦」病院としての機能を十分備えることができた。平成２５年５月開院が円滑に行われるよう、最終準備に取り組むとともに、年間手術件数１万件以上を目標に努力する。